

論文——シンポジウム「移民への錯綜する眼差し——排除と寛容のはざままで」

19世紀ロンドンのアイルランド人移民 ——複眼的・長期的視点から¹

勝田 俊輔

はじめに

19世紀に大量の移民がアイルランド島からグレートブリテン（以下、ブリテン）に到来したことは良く知られている。² 例えば1851年の人口調査の時点では、50万以上のアイルランド生まれの人間（移民一世）がブリテンに居住していた。彼らの中には季節労働者として短期間滞在するにとどまった者もあり、また一部はブリテンから北米大陸に再渡航したとは言え、大半はブリテンを永住の地とした。アイルランドからの移民は、ブリテン島が経験した異邦人の流入としては、ノルマン・コンクエスト以来の規模の現象と呼ばれることさえある。³

このアイルランド移民は、しばしば自分たち同士で結婚し、子孫を残したため、独自のコミュニティを形成する傾向が強かった。彼らについては、同時代の論者は非好意的なトーンで語ることが通例であった。すなわち、宗教的にはカトリックで、エスニシティにおいては「ケルト」の末裔であり、政治的には反英ナショナリズム（時として暴力性を持つ）の影響を強く受け、経済的には難民に近い形で渡来して低賃金労働に従事したため貧しく、そして文化的には怠惰で犯罪に手を染めやすい——こうしたステレオタイプ化を受けて、後世の歴史家（の一部）も、アイルランド人コミュニティとホスト社会との間で発生した摩擦や対立の局面を主要な関心事とした。その一方、ブリテン島各地でアイルランド人が送った「生」の実態の研究も進められており、摩擦や対立の存在自体は否定されないものの、彼らが実際には多様な集団だったこと、ホスト社会との関係が地域によって違っていた

こと、また彼らの立場が数十年という時間を経て変化したこと、そしてホスト社会への同化の側面も存在していたことなどが解明されている。

本稿は、こうした個別研究が進む近年の研究動向に即して、そしてシンポジウムの他の報告との対話の可能性を探るために、19世紀のロンドンにおけるアイルランド人を分析の主な対象とする。もちろん、ロンドンにもさまざまなタイプのアイルランド人が存在したが、本稿はとくにイースト・エンド地区におけるカトリックのアイルランド人労働者に注目し、彼らの経験のニュアンス(ステレオタイプに収まり切らない諸側面)を描きだすことを目的とする。

(1) アイルランド移民・アイルランド系の研究史

具体的な分析に入る前に、研究史を確認しておく。19世紀ブリテンにおけるアイルランド人の研究において最も関心を集めてきた都市を一つ挙げれば、ロンドンではなくリヴァプールである。⁴ アイルランド人にとって、ブリテンの玄関口はリヴァプールであり、特に大飢饉中の1847年には前半だけで30万の人間がアイルランドから到来し、1851年の段階では市の人口の23%がアイルランド生まれの人間だったとされる。⁵ だが、1870年代の不況により、アイルランドからブリテンへの移民の絶対数が減る一方、ブリテンの産業構造の変化もあって、イングランドの工業地帯は移民にとって魅力的な場所ではなくなった。このため世紀末から20世紀初頭にかけてのアイルランド人は、ロンドンに集住する傾向を示すことになった。⁶ ただし19世紀ロンドンのアイルランド人については、1979年刊のリーズの優れた著作の他には、大きな研究成果は出ていない。当時ロンドンは世界最大かつコスモポリタンな都市であり、アイルランド人移民(一世)の総人口に占める比率がせいぜい数%にとどまったため、アイルランド人の問題を抽出し難かったことも、研究の相対的な停滞の要因だったと思われる。

ステレオタイプ化されたアイルランド人の負の経験についての研究は、その定義からして、特定の地域に限定されない形で分析を行うことになった。その最も強烈な告発となったのが、アメリカ人の史家カーティス(L.

Perry Curtis, Jr.) の著作である。1968年刊の *Anglo-Saxons and Celts* は、副題に 'anti-Irish prejudice' との語句があるように、イングランド人が⁶、ヴィクトリア期の特に後期に強い影響力を持った人種主義理論を用いて、アイルランド人を「ケルト」の劣等人種と見なした事実を示した。その上で同著は、そのことがイングランド人に、「ケルト」とは生物学的に峻別される「アングロ＝サクソン」としての自己認識を与えたと論じた。⁷ さらにカーティスは、続く *Apes and Angels* (初版1971、改訂版1991) において、当時の戯画におけるこうした人種主義的な差別意識の形成と機能を分析した。⁸

カーティスによれば、こうした強い差別を受け続けたアイルランド人は、結局ブリテン社会に同化することができなかつたとされる。この同化不全の問題を人種主義とは別の側面から論じたのがヒックマン (Mary J. Hickman) である。彼女は1995年刊の *Religion, class and identity* において、カトリックで労働者階級に属するアイルランド人について、以下のように論じる——国家が教会の協力のもとに彼らの児童に提供したカトリック公教育の結果、アイルランド人は世代を経るにつれてアイデンティティを喪失していったのだが、その一方でカトリックとしてブリテン社会では他者の地位に留め置かれた；同時に、こうした他者の存在が、ブリテンの人間にとってアイデンティティを形成する際の柱の一つとなった。⁹

カーティスやヒックマンの議論は、「アイルランド人差別」の問題を分析するための理論的な枠組みを提供した点で、研究史上貴重な貢献をなしたと言える。ただし、これらの枠組みで19世紀アイルランド人の経験の全てを語り得るわけではない。と言うのも、アイルランドは12世紀以来、イングランド／ブリテンの植民地であり、18世紀までにイングランド人、スコットランド人、その後小規模ながらフランス人とドイツ人が入植している。そして、今度はこうした複雑なエスニシティ構成を持つ「アイルランド人」が、特に19世紀にブリテン島に大規模に逆移住することになったのである。このことは、ブリテンにおけるアイルランド人が、プロテスタント信仰をもつ人間や中産階級に属する人間、さらには「アイルランド人」としてのアイデンティティを放棄して「ブリティッシュ」となることを選んだ人間も含んでおり、かなり多様な集団だったことを強く示唆する。

例えば、アイルランド人の典型とされる姓を持ち、19世紀のブリテン

で悪名高い存在となった説教師のマーフィ (William Murphy, 1834-1872) は、アイルランド南部の出身でカトリックの家庭に生まれたが、彼の幼少期に一家はアングリカンに転向し、本人は長じてアイルランドおよびイングランド各地で反カトリックの講演を行った。イングランドのカトリック (大半がアイルランド人) は彼に敵意を示し、講演会が暴動を引き起こすこともあった。マーフィの事例は、極端なものとは言え、孤立した例ではない。1850年代からイングランド各地で反カトリック運動が高揚した際、最も活動的だったアングリカンの聖職者の多くは、アイルランドに出自を持った。¹⁰ さらには、そもそも「アイルランド人」の枠に押し込められることを嫌った人間もいた。田中孝信氏の取りあげたパーク (Thomas Burke) は、姓および関係者の証言から判断すると中世のイングランド系ノルマン人入植者の家系の出だったようだが、¹¹ 死亡時の新聞記事には、「家系をたどればアイルランド人だが、彼の多くの先人たちと同じように、完全にロンドンの人間となった」と記されている。¹²

ブリテンのアイルランド人について、異質で差別された集団としての側面を取り上げる研究は、こうした側面が関連史料に最も現れやすかったというだけでなく、20世紀の社会問題——ブリテンだけでなくアメリカにおける人種差別の問題も含む——と関連させて議論を行うことができるため、強い動機をもつものだったと言える。とは言え、こうした真摯な問題意識が称賛に値するのは確かだとしても、これらの研究が逆に、新たな差別とその結果のルサンチマンを再生産している可能性も否定できないのではないか。この困難な問題については研究者の間でも論争があるが、¹³ ここでは答える準備がないため、指摘しておくにとどめたい。いずれにせよ、19世紀ブリテンにおけるアイルランド人については、問題意識先行型のカーティスやヒックマンの研究とは出発点を異にする実証的な歴史研究も成果を積み重ねてきている。以下、その主なものを紹介・検討する。

すでに1963年にジャクスン (John Archer Jackson) は、アイルランド人 = カトリック = 貧しい = ナショナリストとの図式を基本としつつも、彼らの地位向上や社会的受容の側面も指摘していた。¹⁴ ただしジャクスンの著作はこの時期の歴史学でむしろ例外的であり、総じてブリテンの歴史家は、20世紀末にいたるまでアイルランド人の研究に積極的ではなかった。¹⁵ こ

の点を大きく改めることになったのが、チェスタ大学のスウィフト (Roger Swift) およびダラム大学のギリ (Sheridan Gilley) に率いられて1980年代に始まった一連の共同研究である。¹⁶ これらはブリテン島の数十の地域 (都市および農村部) をフィールドとして、政治・宗教・雇用・犯罪・エスニシティ・教育・居住・文芸と言った多様な側面からの分析を行ったものであり、ブリテン島各地でのアイルランド人の経験に関する知見を一気に拡大することになった。

共同研究の最初の成果である *The Irish in the Victorian city* (1985) では、カトリックで貧しいアイルランド人が「カースト外」の存在としてしばしば敵視されたことを前提とした上で、そこに収まりきれない事例も少なからずあったこと、そしてこうした逆境下でありながらもアイルランド人集団が宗教的にはカトリック信仰、政治的にはナショナリズムを維持したことを確認している。続く *The Irish in Britain, 1815-1939* (1989) は、前著の枠組みを継承しつつ事例研究を拡大し、カトリックのアイルランド人の政治参加の度合はあまり強くなかった可能性や、特にリヴァプールやグラスゴ、マンチェスタやロンドンのような大都市以外での場においては彼らの経験が多様であり、単純化できない事実を指摘する。

第三の論文集である *The Irish in Victorian Britain* (1999) は、アイルランド人についての個別の分析をさらに深めつつ、大枠においては、彼らがカトリックかつナショナリストとしての独自性を維持しただけでなく、次第にホスト社会に居場所を見出していった、とする。第四論文集 *Irish identities in Victorian Britain* (2011) では、アイルランド人の経験の多様性そのものが焦点とされており、言いかえると、第一論文集以来の枠組みは後景に退いている。とりわけ、女性およびプロテスタントのアイルランド人も分析の対象とされていることは新しい展開である。こうした議論の広がり、リヴァプール大学にアイルランド研究所 (Institute of Irish Studies) が1988年に設立されたことに示されるように、ブリテンにおけるアイルランド研究の裾野が広がったことを反映していると考えられる (ただし、アメリカにおけるアイルランド人の研究と比べた場合には、依然として遅れが見られる¹⁷)。

この間、共同研究ではなく単著の形でも、重要な成果が公にされている。

ジャクソンの書が出て以来、約30年ぶりに19世紀ブリテンにおけるアイルランド人の全体像を描こうとした単著が1991年のデイヴィス (Graham Davis) の書である。¹⁸ 同書は、ブリテンとアイルランド (共和国) の間の関係を前向きに見る当時の政治状況を出発点に執筆されており、アイルランド人の経験およびブリテン社会の反応における負の側面よりも、双方の多様性を強調することに力点が置かれている。

Swift と Gilley をついでアイルランド人研究のリーダー的存在となっているのがマクライルド (Donald M. MacRaild) であり、1999年の *Irish migrants in Modern Britain* と、その改訂版 *The Irish Diaspora in Britain* を2011年に公にしている。¹⁹ マクライルドは、対立の局面が日常化されていたわけではないことは認めつつ、カトリックのアイルランド人は、やはりブリテン社会に統合されず、同時代においても異質かつ厄介者と見なされた集団だったとの見解をとる (この点で Davis の見解を批判してもいる)。なおマクライルドは、彼らにこうしたステレオタイプのレッテルが貼られたのは、第一にブリテン社会がそうした「他者」を欲したからであり、第二にプロテスタントのアイルランド人がブリテン社会へ同化したことが逆にカトリックの同化を困難としたからである、とする。言いかえると、カトリックのアイルランド人の負の経験は、彼らの「本質的な」性質によるものではなく、置かれた状況の産物であったということになる。こうした関係論的な解釈は、マクライルドが前世代の歴史家に対して持つ強みと言え、とくにプロテスタントのアイルランド人について、単にその存在を指摘するだけでなく、その役割を——史料上の問題もあって跡づけるのは容易ではないが——議論のうちに構造化しようとしている点は重要である。

なお、以下の論文集も、ブリテンにおけるアイルランド人についての重要な論考を含んでいる——Patrick O'Sullivan (ed.) *The Irish World Wide: history, heritage, identity*, 6 vols. (London: Leicester U. P., 1992–1997); Patrick Buckland and John Belchem (eds.), *The Irish in British labour history* (Liverpool: University of Liverpool, Institute of Irish Studies, 1993); Donal H. Akenson, *The Irish Diaspora: a primer* (Belfast: Queen's University of Belfast, Institute of Irish Studies, 1996); Andy Bielenberg (ed.), *The Irish Diaspora* (Harlow: Pearson Education, 2000); Enda Delaney and Donald M. MacRaild (eds.)

Irish migration, networks, and ethnic identities since 1750 (Abingdon: Routledge, 2007)。²⁰ ここには書籍のみを挙げたので、雑誌論文も入れると研究文献の総数はかなりのものになる。研究史をまとめた動向論文としてはスウィフトのものがある。²¹ また上記マクレイルドの *The Irish Diaspora in Britain, 1750-1939* (2011) の巻末文献解題も有益である。

以上の研究史の流れを踏まえて今後の展望を述べるならば、これまでの個別研究の進展に伴って「アイルランド人」の内的多様性および、到来した時期や地域による経験の違いが明らかにされつつあり、今後もその流れは続くと思われる。他方でこうした個別研究の蓄積が進んで全体像を書きかえる必要が生じた場合(量的な意味での変化)もしくは、分析の新視角が登場した際(質的な変化)に、新しい総合化が試みられることになろう。

(2) アイルランド人のカトリック性

以下では、本稿の主題に移り、ロンドンにおけるアイルランド人の具体的な経験を検討する。最初に彼らのカトリック性について見ると、出身地であるアイルランド島は確かに全体としてはカトリックが人口の大多数を占めたが、アルスタなどプロテスタントの相対的に多い地域——宗教改革後にイングランド／スコットランドから移住した人々の子孫が住んでいた——からも「アイルランド人」はブリテン島に移民してきていた。²² とくにアルスタ出身者は、19世紀末から20世紀初めにかけてのブリテンへの移民の大半を占めたとされ、²³ 19世紀のアイルランドからブリテンへの移民全体に占めるカトリックとプロテスタントの比率はおよそ3:1だったとの推算もある。²⁴ ただし正確な数値を出すのは困難であり、ここには史料上の問題がある。19世紀ブリテンにおけるアイルランド人研究の基本史料として、10年毎に実施されたセンサスがあるが、出生地がアイルランドと記されている場合(移民一世)でも、信仰についての区分はない。また1851年の宗教センサスは、この年の特定の日曜日に教会に行った信徒集団の数を宗派ごとに合計したものに過ぎず、この日に教会に行かなかった人間が少なからずいた可能性を考えると、宗派別人口を正確に計算したものとはなり得ない。²⁵

アイルランド人の多様性は宗教面だけにとどまらない。大多数を占めたカトリックについても、彼らは単一のエスニック集団ではなく、ゲールと呼ばれるアイルランドの先住文化に属する人々の子孫と、最初の入植者であるノルマン系の人々の子孫(ブリテン諸島における宗教改革後もカトリック信仰を維持した)の両方からなる。例えばジェイムズ・ジョイスの姓Joyceは、ゲール系ではなくノルマン系のものである。エドモンド・バーク(Burke家はある時点でプロテスタントに改宗した)の姓も同様である。一般に、アイルランド人に特徴的である苗字としてOやMacがつくものが挙げられ(ただし、後者はスコットランド系の場合もある)、これはゲール系であることを示す。その一方、Fitzがつく苗字もアイルランド系と見なされがちだが、Fitzは現代フランス語のfilsと同語源であり、ノルマン系の姓である。

なお、ゲールは今日の歴史学にあっては大陸の「ケルト」の一変種ではなく、独自の文化をなしていたと目されている。²⁶ ヴィクトリア期ブリテンの人間が、アイルランド人を総じて「ケルト」と見なして差別する人種主義の傾向を持ったと告発する上記カーティスの議論は、『パンチ』などの同時代の史料にもとづいている点でやむを得ないが(根拠があるが)、今日では二重の意味で無理のあるものと言える。

このようにエスニシティの面で単一ではなかったカトリックのアイルランド人が、どのような意味で「カトリック」だったのかという点についても、検討する必要がある。と言うのも、移民一世は信心深いカトリックとしてブリテンに渡って来たとは言い切れない。19世紀初めのアイルランドにおいて、カトリック信徒は、ミサへの出席をしばしば怠り、教義にも無知であるなど、教会の基準からするとかなりルーズな形で信仰を実践していた。²⁷ 加えて、受け入れ地のブリテンでは、18世紀末以来カトリック信仰は自由化されていたものの、数十万単位で到来する大量のアイルランド人カトリック(アイルランド語話者もいた)を司牧するための教会組織は存在しなかったのである。

このため、ブリテンのカトリック教会は急いで信仰の場の整備に乗り出し、1845年にイングランド内の代理司教区を倍増し、さらに1850年には宗教改革以来約300年ぶりに司教区を再建した(スコットランドでの司教

区再建は1873年)。ロンドンを例にとると、移民2世も含めたロンドンのアイルランド人の数は1851年に15万を超え、1861年には18万近くに達していた可能性がある。²⁸ 1780年のロンドンに存在したカトリックの教会堂は3つ(ただし同年のゴードン暴動で破壊された)のみだったが、アイルランドからの移民の急増を受けて1840年には26に増え、²⁹ さらに1850年の時点では教会および礼拝堂が104存在し、168人の聖職者が活動していた。³⁰ また1860年までに34の修道会がロンドンに設立されていた。³¹ 一連の動きは、この地のプロテスタントにとってだけでなく、宗教改革以来、信仰実践を「許された」存在に過ぎず、控え目な姿勢を旨としていたロンドン(およびイングランド)のカトリック信徒にとっても、大きな変化を意味した。³²

こうした動きを推進したのが、1840年にイングランド中部地区(ロンドンを含む)司教補、1849年にロンドン地区(管区が変更されていた)代理司教、翌年に初代ウェストミンスター大司教に任じられたワイズマン(Nicholas Patrick Stephen Wiseman、在任1850-65)である。一例を挙げると、彼の尽力で1848年に建立されたサザークの聖ジョージ教会の聖別を祝するミサには、13人の高位聖職者を含む240人の聖職者が参加し、またノーフォーク公爵夫妻をはじめとするカトリック貴族も参列した。この教会は1852年に司教座聖堂となる(ただしウェストミンスター大司教区とは別管区)。³³ このワイズマン自身、アイルランド移民(一世)だったと言うことも可能である。彼の両親の家系は、ともにアイルランド出身のカトリックでセビリヤに在住していたが、ワイズマンの誕生後、父親の死去に伴って母は子供たちを連れてアイルランドに戻っていた。その後ワイズマンと兄は学齢に達するとイングランドの神学校に通うことになり、カトリック聖職者となる道を歩み始めたのである。³⁴

カトリック信仰のための組織がこのように急速に整備されつつあったにもかかわらず、1851年のロンドンのカトリック(アイルランド人が大半)の礼拝出席率は、ロンドン全体もしくはイングランド全体の出席率よりも低かった。この傾向は、教会組織がその後さらに整っていったにもかかわらずむしろ強化され、礼拝出席率は20世紀にかけて一層低下していた可能性が強い。³⁵ このことは、同じ時期のアイルランドでカトリック信徒の礼

拝出席率が極めて高かったことと顕著な違いをなしている。³⁶

とは言え、ロンドンのカトリック教会がアイルランド人の「取り込み」に失敗したと性急に結論すべきではない。前述のように、そもそもセンサスの礼拝出席率は信仰に関する確実な指標となるとは言い切れない。19世紀末のブリテン、とくにロンドンにおいて大規模な社会調査を実施したブース(Charles Booth)は、「ロンドンにおける宗教建築物のうちで、カトリック関連のものほど活用されている建物は無い」とし、また「この[カトリック]教会が信徒に及ぼしている影響力の範囲と程度については、疑問の余地がない」と結論づけている。³⁷ 教会は、アイルランド聖人の祭日を祝ったり、アイルランド文化についての(英語による)講演会を組織したり、著作物を公刊したりするなどして移民へのアピールを行いつつ、「勤勉・清貧・純血」といったカトリックの徳を説いて、影響力を強めていった。³⁸ こうした風紀改善・社会統制運動はヴィクトリア期のブリテンにおいて様々な次元で展開されたが、アイルランド人に対しては、カトリック教会がその主な担い手となったのである。³⁹ この運動を推進した中心人物が、ワイズマンをついでウェストミンスター第二代大司教となったマニング(Henry Edward Manning、在任1865-92)である。⁴⁰

マニングはイングランドの旧家の子であり、国会議員を父親に持ち、本人もハロー校からオクスフォード大に進み、卒業後は官僚となってグラッドストンの知己を得るなど、エリートとして青年期を送った人間である。その後アングリカンの聖職者となるものの、当時のイングランド国教会のあり方に重大な疑念を抱き、カトリックに信仰を変え、大司教及び枢機卿となった。こうした出自を持つマニングが晩年に、自身は生涯をアイルランド人のために費やしたと述懐したことは、単に風紀改善・社会統制に献身的に取り組んだと言う事実にとどまらない重要性を持つ。⁴¹ というのも、当時のイングランド人のカトリック信徒には上流階層も含まれたが、これとは対照的にアイルランド人は、社会層においては圧倒的に下層が多く、また政治的にもアイルランド・ナショナリズムと親和性が強いなど、かなり異質の存在であった。すなわち、マニングは両者の橋渡しを務める役割も担ったのである。⁴²

カトリックのアイルランド人に対するマニングの風紀改善・社会統制の

事蹟のうち、特に重要なのが禁酒運動である。彼は、アイルランド人が、アイルランドの守護聖人である聖パトリックの祭日(3月17日)に飲酒して騒動を起こす傾向があったことに注目し、1867年に「聖パトリックの休止(Truce of St Patrick)」の標語を掲げて彼らに三日間の断酒を呼びかけ、その一方でローマ教皇と交渉し、成功した者に贖宥状を発行する(ただし、告解などの手続きの上で)との約束を得た。マニングは続いて、1872年に救世軍型の組織にもとづく「十字架同盟(the League of the Cross)」を設立し、ロンドン市内で独特のコスチュームをまとったパレードを組織するなどして、断酒を禁酒に拡大する運動を展開した。⁴³

マニングが断酒・禁酒運動を各地で組織し始めた1860年代以降、ブリテンにおけるアイルランド人の飲酒率は低下していったとのデータもあるが、⁴⁴ もちろん、アイルランド人、特にその労働者階級の間で飲酒の文化が失われることはなかった。だが、聖職者の存在が規律維持の効果を持ち得たことも否定できない。会衆派の牧師がブースに伝えたところによれば、カトリックの聖職者が「パブにいる男を、襟首を掴んで街頭に引きずり出し、杖で打ったりする」ことは珍しいことではなかった。ブースは、カトリック聖職者がこうした極端な行為に出ることができたのは、彼らが「貧者の中の存在」として信徒と生活を共にしていたからであるとし、⁴⁵ 「彼ら貧民の日常において、教会との絆が大いなる助けとなっているのであり、教会の配慮が、彼らの荒っぽい生活に自制と統制、そして祝福を与えているのだ」と結論している。⁴⁶

ブースの指摘するように、カトリックのアイルランド人労働者の多くが貧困状態にあったのは確かである。だが、ここでも一面化は避けねばならない。そのことを確認するために、アイルランド人労働者の実態について、検討する必要がある。

(3) アイルランド人労働者と1889年港湾ストライキ

ブリテンの諸都市には18世紀からアイルランド人の貧困層が一定数存在していた。ただし、当時のブリテンで貧しかったのはアイルランド人だけではない。それどころか、特にロンドンのアイルランド人については、ス

ミスが『国富論』第1編第10章において、ジャガイモの恩恵によって「グレートブリテン……で最も強壯な男性、最も美しい女性」と記しているように、むしろ半ば好意的な眼差しが向けられてもいた。⁴⁷ところが19世紀に入ると、同時代の観察記録における評価は悪化する。その典型がエンゲルス『イングランドにおける労働者階級の状態』である。同書の「アイルランド人の移住」の章においてエンゲルスは、アイルランド人は全てスラム街に居住するとし、また「不潔な生活に慣れている」彼らが、イングランド人であれば受け入れ難い低賃金労働に耐えたことで全般的な賃金水準が下がり、その結果急速な資本形成が可能となって、イングランドにおける産業革命の進行速度が増した、と述べている。⁴⁸エンゲルスとは大きく異なった角度からではあるが、同時代のロンドンの庶民の生活を克明に記したジャーナリストであるメイヒュー(Henry Mayhew)——『パンチ』創刊にも関わった——も、アイルランド人を、労働と物乞い(その方が金になった)で生きている最貧困層として描き出している。⁴⁹

こうした観察記録以外の史料からも、アイルランド人＝労働者かつ貧困層、との結論が引き出されやすい。センサスを確認すると、大飢饉から時期が近く、従って最も多くの貧困者が移民したと考えられる1851年、1861年、1871年における職業区分では、アイルランド人の60-70%が最下層である非熟練・半熟練労働者のカテゴリーに分類されている。⁵⁰だが、これらのセンサスにおける「アイルランド人」は、上述のように「アイルランド生まれ」の移民一世でしかないことに注意しなくてはならない。移民二世、三世と時を経るにつれ、アイルランド人が社会的に上昇していった可能性は当然想定し得る。このことは、ヴィクトリア期だけでも60年以上の長さを持った事実を考えると、無視し得ない点である。

リーズによれば、実はロンドンにはアイルランド人ゲッターの類は存在しなかった。彼らはイングランド人を含めた他のエスニック集団と混住しており、その居住パターンは社会階層、および(労働者階級の場合は)働き口によって規定されていた可能性が高い。⁵¹このことは、アイルランド人が労働者階級に限定されなかったことの裏付けとなるが、本稿との関連で重視すべきは、労働者階級内部での階層性である。リーズがアイルランド人労働者について論ずる場合は非熟練労働者を主な対象としている

が、⁵² 実は19世紀末のロンドンには、アイルランド人の熟練労働者も存在した。このことを如実に示すのが、マニングが大きな役割を果たすことになった1889年の港湾ストライキである。

このストライキは、労働者側の要求が部分的ながらも認められたことだけでなく、それまで職能別・産業別に組織されていた種々の労働組合が一般組合へと成長する契機となったことで、労働運動の歴史において重要な意義を持つものとされる。⁵³ では、このストライキにおいてアイルランド人の熟練労働者が占めた位置はどのようなものだったのか。

当時の港湾労働者の最上層は、熟練を必要とする沖仲仕 (stevedore) すなわち船倉に荷物を積み込む作業にあたる労働者であり、彼らの賃金は週に36シリング(繁忙期とそれ以外の時期を平均した数値)に達することもあった。⁵⁴ この一方で、荷揚げや運搬などの単純作業にあたる非熟練労働者の場合、賃金は週7シリングもしくはそれ以下にとどまった。これらの違いに見られるように、沖仲仕は歴史学においていわゆる労働貴族と呼ばれる存在であり、史料上でrespectableと描写されることがあった一方で、自らを港湾労働者 (dock labourer) と呼ぶことを避けていたともされる。⁵⁵ この沖仲仕たちのうちには、カトリックのアイルランド人と目される者が多かった。先に挙げた史料上の制約から、移民二世以降のアイルランド人の数について正確な値を出すのは不可能だが、スト当事者の回想録では「沖仲仕たちは熟練工で、多くがアイルランドの家系である」とされている。⁵⁶ 別な史料からの情報も示しておく、ブースは、聞き取り調査の結果、ロンドン全体で約8,600人の沖仲仕がおり、約75%がロンドン生まれだが、残りの大半はアイルランド人(移民一世)であり、さらに「ロンドン生まれの[沖仲仕の]多くもアイルランド系で、大飢饉時にテムズ川に大挙してやって来たアイルランド人の子孫である」と記している。⁵⁷ アイルランド人に社会的上昇の機会があったことの重要な証言と言える。なお逆に、非熟練の港湾労働者については、19世紀半ばにはその3/4はアイルランド人だったとされるが、1889年ストライキの時期には、アイルランド人は少数派となっていた。⁵⁸ データの検証は今後の課題としたいが、ユダヤ系などの新移民に職を追われていた可能性は否定できない。

いずれにせよ、このストライキは非熟練港湾労働者の運動として始まっ

たが、指導者の一人の回想によれば、沖仲仕たちが共闘に同意したことが極めて大きな意味を持った。⁵⁹ それ以前には、沖仲仕たちは独自の組合を持ちながらも、労働運動に際して他の非熟練労働者集団と一線を画す姿勢を取りがちだったのである。⁶⁰ 彼らを1889年ストライキの際に説得して運動に引き込んだのがマッカーシ(Tom McCarthy)という沖仲仕の組合指導者であり、彼もアイルランド移民一世の両親の下に、ロンドンのイースト・エンド、それもライムハウス地区に生まれた人間であった。⁶¹

こうして熟練労働者(沖仲仕)と非熟練労働者の共闘が実現したのだが、経営者側との賃金交渉は難航し、そのためスト破りが動員され、これに対してピケが張られるなど、事態は緊迫した。ここで仲裁の労を執ったのが大司教マニングであり、彼は妥協案を提示し、双方に譲歩させる形でストを終結させた。ストの別の指導者(非熟練労働者)——アイルランド移民一世の母親を持った⁶²——は、禁酒運動を行ったマニングは自分にとって「人生で最大の影響を与えてくれた」恩人であると述べ、マニングが会社側と縁戚関係にあったにもかかわらず労働者の主張に理解を示したことを、アングリカンのロンドン主教の冷淡さと対比している。だがその一方、この指導者は、その人格的圧力に屈して妥協案を受け入れざるを得なかったマニングとの会談を、「悪夢としか考えようがない」と回顧している。⁶³ ここに、ロンドンのカトリック教会が19世紀後半に作り上げた、アイルランド人労働者に対する非宗教面での影響力を見出すことが可能なのではないか。

課題と展望

19世紀ブリテンにおけるアイルランド人については、問題関心の所在および史料の性格からして、一面的な表象が作られやすい。本稿では、そうしたステレオタイプ化されたイメージの修正を試みてきた。ただし、残された課題も多い。第一に、アイルランド人の政治性とブリテンのカトリック教会の関係である。1862年、イタリアで教皇領を征服したガリバルディを支持する人々によってハイド・パークで集会が開かれた際に、カトリックのアイルランド人がこれを襲撃する事件が起こった。このため大司教ワ

イズマンは、「アイルランド人の愛しい子供たち」に教書を発して自制を説き、また管轄下の聖職者に対しては、アイルランド人たちが「集会に参加したり街頭で群れをなしたり」することのないよう呼びかけるように指示を出した。⁶⁴ マニングも、19世紀後半に強い影響力をもったフィーニアンに対して、その暴力主義を非難した。だがその一方で彼は、アイルランド人のナショナリズムそれ自体を非難していたわけではなかったように見える。⁶⁵ こうしたブリテンのカトリック教会の姿勢は、19世紀後半の連合王国政治史を考える上で重要であろう。

第二に、アイルランド人女性への視点が欠落していることである。これと関連して第三には、ヴィクトリア期のアイルランド人は、男女を問わず、「女性視」される傾向があり、⁶⁶ このイメージの分析も今後の課題である。第四に、ロンドンでは20世紀にもアイルランドからの移民の波が続いていた。⁶⁷ 彼らの経験は19世紀のアイルランド人とどう異なっていたのだろうか。この点の分析は、本稿の議論を相対化する上でも重要であろう。

注

- 1 本稿は、シンポジウムでの報告原稿に加筆・修正を施したものです。シンポジウムの準備の過程および当日の議論から多くを学びました。この場でお礼申し上げます。
- 2 本稿では、「アイルランド」はアイルランド島を意味する。また「アイルランド人」の語を、ブリテンに居住していたアイルランド出身者（移民一世）およびその子孫の総称として用いる。両者を区別する場合は、「移民一世」および「アイルランド系」とする。
- 3 Lynn Hollen Lees, *Exiles of Erin: Irish emigrants in Victorian London* (Manchester: Manchester U. P., 1979), p. 15.
- 4 リヴァプールのアイルランド人に関する研究については、本稿で紹介する論文集に収録された諸論考の他に、John Belchem, *Irish, Catholic and scouse: the history of the Liverpool-Irish, 1800-1939* (Liverpool: Liverpool U. P., 2007) も参照。
- 5 Roger Swift, 'General introduction', in Swift (ed.), *Irish migrants in Britain, 1815-1914: a documentary history* (Cork: Cork U. P., 2002), p. xx; Tom Gallagher, 'A tale of the two cities: communal strife in Glasgow and Liverpool in 1914', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in the Victorian City* (London: Croom Helm,

- 1985), p. 107.
- 6 John Hutchinson and Alan O'Day, 'The Gaelic revival in London, 1900-22: limits and ethnic identity', in Gilley and Swift (eds.), *The Irish in Victorian Britain: the local dimension* (Dublin: Four Courts Press, 1999), pp. 257-258.
 - 7 *Anglo-Saxons and Celts: a study of anti-Irish prejudice in Victorian England* (New York: New York U. P.).
 - 8 *Apes and angels: the Irishman in Victorian caricature* (Washington: Smithsonian Institution).
 - 9 *Religion, class and identity: the state, the Catholic church and the education of the Irish in Britain* (Avebury, Aldershot: Ashgate Publishing, 1995).
 - 10 Tom Gallagher, 'A tale of the two cities: communal strife in Glasgow and Liverpool in 1914', pp. 112-113; Roger Swift, "'Another Stafford street row": law, order and the Irish presence in mid-Victorian Wolverhampton', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in the Victorian City*, pp. 191-194.
 - 11 Anne Witchard, 'Thomas Burke, the "Laureate of Limehouse": a new biographical outline', *English Literature in Transition 1880-1920*, vol. 48, no. 2, Jan. 2005, p. 183, note 18.
 - 12 *Irish Independent*, 24 Sept. 1945.
 - 13 Graham Davis, 'Little Irelands', in Roger Swift and Sheridan Gilley (eds.), *The Irish in Britain, 1815-1939* (Savage: Barnes & Noble Books, 1989), p. 105.
 - 14 *The Irish in Britain*, (London: Routledge & K. Paul, 1963).
 - 15 Gilley and Swift, 'Introduction', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in the Victorian city*, p. 1; Swift, 'General introduction', in Swift (ed.), *Irish migrants in Britain*, p. xvii.
 - 16 各論文集の書誌情報は、本稿の註に記してある。
 - 17 Donald M. MacRaild, *The Irish Diaspora in Britain, 1750-1939* (1999, second edition, 2011), p. 3.
 - 18 *The Irish in Britain, 1815-1914* (Dublin: Gill and Macmillan).
 - 19 書誌情報は本稿註17を参照。この改訂版はデジタル資料の普及の恩恵を受けた増補版ともなっている。MacRaild, *The Irish in Britain*, 2006は簡便な入門書である。なおマクライルドは、本文に記したように、視野をブリテンへのアイルランド移民のみに限定せず、ブリテン諸島からの外部世界への移民をも研究対象に含めている。
 - 20 なお Donald M. MacRaild, Tenja Bueltmann and J. C. D. Clark (eds.), *British and Irish Diasporas: societies, cultures and ideologies* (Manchester: Manchester U. P., 2019)は最新の論集だが、本稿と直接かかわる論考は含まれていない。
 - 21 Roger Swift, 'Historians and the Irish: Recent writings on the Irish in

- nineteenth-century Britain', in *Immigrants & Minorities*, vol. 18, nos. 2-3, 1999; Swift, 'Identifying the Irish in Victorian Britain: recent trends in historiography', in Swift and Gilley (eds.), *Irish identities in Victorian Britain* (London: Routledge).
- 22 Davis, *The Irish in Britain, 1815-1914*, p. 137.
- 23 Donald Harman Akenson, *Small differences: Irish Catholics and Irish Protestants, 15-1922: an international perspective* (Montreal and Kingston: McGill-Queen's U. P., 1988), pp. 51-52.
- 24 Swift (ed.) *Irish migrants in Britain, 1815-1914*, p. 120. 以下も参照 : Hutchinson and O'Day, 'The Gaelic revival in London, 1900-22', p. 258.
- 25 Akenson, *Small differences*, p. 53.
- 26 田付秋子「先史時代から初期キリスト教時代」(上野格・森ありさ・勝田俊輔編『世界歴史大系 アイルランド史』(山川出版社 2018)所収)、14-15頁。
- 27 Gerard Connolly, 'Irish and Catholic: myth or reality? Another sort of Irish and the renewal of the clerical profession among Catholics in England, 1791-1918', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in the Victorian city*, pp. 227-230.
- 28 Lees, *Exiles of Erin*, pp. 46-47.
- 29 Lees, *Exiles of Erin*, pp. 172-173, 180.
- 30 Jackson, *The Irish in Britain*, p. 139.
- 31 Lees, *Exiles of Erin*, p. 175.
- 32 Jackson, *The Irish in Britain*, p. 137.
- 33 Richard J. Shiefen, *Nicholas Wiseman and the transformation of English Catholicism* (Shepherdstown: Patmos Press, 1984), pp. 182-183.
- 34 ワイズマンの父方の祖先は、少なくとも17世紀のアイルランド国教会の主教、さらにはヘンリ8世期のイングランドの廷臣にまで遡り得る可能性がある(Wilfrid Ward, *The life and times of Cardinal Wiseman* (London: Longmans, Green and Co., 1897), vol. 1, p. 1; William Charles Mark Kent, 'Wiseman, Nicholas Patrick Stephen', Sidney Lee (ed.), *Dictionary of National Biography* (London: Smith, Elder & Co., 1900), vol. 62)。ただしカトリックへの改宗の経緯は不明である。母方のストレンジ(Strange)家は、ノルマン系の入植者の子孫だが、ワイズマンの母親の名はXavieraであり、一家は移住後にスペイン人との婚姻関係を持っていた可能性がある(*Irish Examiner*, 16, 21 February 1865; *Kerry Evening Post*, 18 February 1865)。
- 35 Lees, *Exiles of Erin*, pp. 181-182.
- 36 Emmet Larkin, 'The devotional revolution in Ireland, 1850-1875', *American Historical Review*, vol. 77, no. 3, 1972, p. 636.
- 37 *Life and labour of the people in London, third series: religious influences, vol. 7:*

- summary (London: Macmillan and Co., 1903), pp. 241, 243.
- 38 Lees, *Exiles of Erin*, pp. 193-196.
- 39 Bielenberg, *The Irish diaspora*, p. 30.
- 40 Lees, *Exiles of Erin*, p. 173.
- 41 Gilley and Swift, 'Introduction', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in the Victorian city*, p. 7.
- 42 Jackson, *The Irish in Britain*, p. 142.
- 43 Vincent Alan McClelland, *Cardinal Manning: his public life and influence 1865-1892* (London: Oxford U. P., 1962), pp. 200-203.
- 44 MacRaid, *The Irish Diaspora in Britain*, p. 83.
- 45 Booth, *Life and labour of the people in London, third series: religious influences, vol. 7: summary*, pp. 243-244.
- 46 Booth, *Life and labour of the people in London, third series: religious influences, vol. 2: London north of the Thames: the Inner Ring* (London: Macmillan and Co., 1902), pp. 38-41.
- 47 アダム・スミス(大河内一男監訳)『国富論1』(中央公論社 1978)、268頁。
- 48 エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター』(岩波書店 1990 原著1845)。
- 49 ヘンリー・メイヒュー(ジョン・キャニング編 植松靖夫訳)『ヴィクトリア時代 ロンドン路地裏の生活誌』(原書房 1992 原著1851)、とくに「ある種のアイルランド人街頭商人の身の上話」。
- 50 Colin G. Pooley, 'Segregation or integration? The residential experience of the Irish in mid-Victorian Britain', in Swift and Gilley (eds.), *The Irish in Britain*, pp. 70-71.
- 51 Lees, *Exiles of Erin*, p. 63.
- 52 Lees, *Exiles of Erin*, pp. 116-122.
- 53 前川嘉一「一般労働組合の成立過程——ロンドン・ドック・ストライキ(1889年)を中心にして」『経済論叢』79巻1号、1957年、45頁；前川「イギリス労働組合運動における1889」『経済論叢』97巻1号、1967年、110-111頁。
- 54 前川「一般労働組合の成立過程」、51-53頁。
- 55 Evidence of Benjamin Tillet, 20 Nov. 1888, British parliamentary papers, Select Committee of House of Lords on sweating system, Second report, Proceedings, Minutes of evidence, Appendix, 1888 (448) XXI., pp. 136, 143.
- 56 H. Llewellyn Smith and Vaughan Nash, *The story of the dockers' strike, told by two East Londoners* (New York: Garland Publishing, 1984), p. 23.
- 57 Booth, *Life and labour of the people in London, first series: poverty, vol. 3: blocks of building, schools and immigration* (London: Macmillan and Co., 1904), p. 92.

- 58 J. C. Lovell, 'The Irish and the London dockers', *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, vol. 35, 1977, p. 16.
- 59 Ben Tillett, with a foreword by Philip Snowden, *Memories and reflections* (London: J. Long, 1931), pp. 121–124.
- 60 Tillett, *Memories and reflections*, pp. 113–114; Terry McCarthy (ed.), *The great dock strike* (London: Weidenfeld and Nicolson in association with the Transport and General Workers' Union), pp. 84–85.
- 61 Terry McCarthy, *The great dock strike*, pp. 84–85.
- 62 Lees, *Exiles of Erin*, p. 241; Satnam Virdee, *Racism, class and the racialized outsider* (Basing Stoke: Palgrave Macmillan, 2014), p. 50.
- 63 Tillett, *Memories and reflections*, pp. 91, 147, 152.
- 64 Shiefen, *Nicholas Wiseman and the transformation of English Catholicism*, pp. 334–335.
- 65 McClelland, *Cardinal Manning*, pp. 163–164.
- 66 Susan Kingsley Kent, *Queen Victoria: gender and empire* (New York: Oxford U. P., 2016), pp. 78, 114.
- 67 Bronwen Walter, 'The Diaspora in comparative and multi-generational perspective', in Eugenio F. Biagini and Mary E. Daly (eds.), *The Cambridge social history of modern Ireland* (Cambridge: Cambridge U. P., 2017), p. 427.

——東京大学教授

Summary

The Irish in Nineteenth-Century London: from Diversified and Historical Perspectives

Shunsuke Katsuta

Hundreds of thousands of Irish people emigrated to Britain in the nineteenth century. It can be argued that they constituted the biggest wave of migration to Britain since the Norman Conquest. The immigrant Irish were often seen in a negative light due to the assumption by the British that all Irish were religiously Catholic, economically poor, racially ‘Celtic’, and politically nationalistic. While these anti-Irish attitudes have drawn the attention of some historians, others now offer a more nuanced view and even highlight more positive aspects of the experiences of the Irish immigrants. This paper broadly conforms to the latter trend in historiography. After summarising important extant studies, the paper first confirms that ‘Irish’ immigrants were in fact diverse in terms of ethnicity and religious affiliation. Second, this paper analyses what it meant for Catholic Irish immigrants to be Catholic by focusing on the activities of two Catholic archbishops of Westminster in the late nineteenth century. Third and finally, the paper revises the simplistic association of Irish immigrants with poverty and manual labour, by investigating Irish skilled labourers and their role in the London Dock Strike of 1889.